

東京外国語大学附属図書館の 中東・北アフリカ関連図書

——アラビア語図書を中心に——

青山弘之

中東・北アフリカ

東京外国語大学は、世界の言語

および当該言語圏の政治、経済、歴史、社会、文化を専門的に研究・教育する国内屈指の大学であり、附属図書館は、大学設立当初から外国語図書の収集に努めてきた。本稿では、同図書館の蔵書のうち、中東・北アフリカ地域の諸言語の図書に焦点を当て、その所蔵状況を概説する。そのうえで、筆者が研究対象とするアラブ地域に関するアラビア語蔵書の特色を紹介する。

なお、東京外国語大学の附置研究所であるアジア・アフリカ言語文化研究所も、中東・北アフリカ関連の書籍・研究資料を多く所蔵しているが、その詳細に関しては、永原陽子「東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の所蔵図書から」（本誌第一三八号、二〇〇七年三月、二四～二五頁）を別

途参照されたい。

国立情報学研究所の『NACS I S C A T / I L L ニュースレター』第五号（二〇〇一年一月二〇日）は二〇〇一年、目録所在情報サービスに参加する八五三機関を対象に欧米諸語および中国・韓国語を除く外国語図書の所蔵状況に関するアンケート調査を行った。一五三機関が回答した同調査の結果を見ると、国内における中東・北アフリカ地域の諸言語の図書の多さが明らかにになる。

同調査は一〇年前に行われたため、現在の蔵書冊数に若干の変動が生じていることが予想されるが、目録所在情報サービス参加機関が所蔵する外国語図書のなかでアラビ

ア語図書は六万七五三〇冊で第一位を占めている。またペルシア語図書が一万九三二四冊で第七位、トルコ語図書が一万六九二一冊で第八位と上位を占め、これ以外にもヘブライ語図書が四四七七冊で第十六位、オスマン語図書が五一〇冊で第二十六位、アムハラ語図書が四二〇冊で第二十九位に位置している。

一方、東京外国語大学付属図書

館の所蔵状況をまとめたのが表1である。この表を国立情報学研究所の調査結果と対照させると、同図書館における中東・北アフリカ地域の諸言語の蔵書冊数が必ずしも多くないことに気づく。

すなわち、アラビア語図書は四八八冊で第十七位、ペルシア語図書は二七九冊で第二十一位、そしてトルコ語図書は三七三冊で第十九位と、図書館全体の蔵書冊数のなかでいずれも下位に位置しているのである。

このような蔵書数の少なさには幾つかの理由が考えられる。その最大の理由は、東京外国語大学において中東・北アフリカ関連の研究の歴史が比較的浅いという点であろう。

例えば、中東・北アフリカ地域

表1 東京外国語大学の言語別蔵書冊数
(2010年4月現在)

順位	言語	冊数
1	日本語	179,642
2	英語	103,002
3	中国語	51,233
4	ロシア語	40,354
5	ドイツ語	24,712
6	フランス語	23,217
7	スペイン語	19,912
8	ヒンディー語	15,494
9	朝鮮語	11,097
10	イタリア語	9,838
11	ポルトガル語	9,494
12	インド諸語	7,965
13	ウルドゥー語	7,781
14	インドネシア語/マライ語	7,164
15	ポーランド語	6,043
16	モンゴル語	5,379
17	アラビア語	4,898
18	タイ語	4,321
19	トルコ語	3,731
20	ビルマ語	3,146
21	ペルシア語	2,779
22	オランダ語	2,681
23	ベトナム語	2,658
24	ラオ語	1,717
25	チェコ語	1,236
26	クメール語	1,048
27	タガログ語	204
	その他	76,538
	合計	627,284

(出所) <http://www.tufs.ac.jp/library/gaiyo/toukei/gengo-j.html>より筆者作成。

を研究・教育対象とする語科のうち、一九六一年に設立されたアラビア語専攻は半世紀の歴史を有するが、ペルシア語専攻の設立年は一九八〇年、トルコ語専攻は一九九五年と、いずれも東京外国語大学の専攻語科のなかでは新しい学科に含まれる。

とはいえ、質的な側面から中東・北アフリカ関連の図書、とりわけアラビア語図書を見ると、そこには本学の研究・教育の特色と日本のアカデミアにおける独自性を見出すことができる。

本学における選書作業は、専攻語の研究・教育に携わる教員・研究者が中心的な役割を担っている。アラビア語に限って見た場合、歴代の教員・研究者は、アラブ文学、アラブ・イスラーム思想史、宗教学、言語学、近現代史、地域研究を専門としてきた。そして、こうした網羅的な布陣がアラビア語図書の分野の多様化に寄与しており、他機関における収集が必ずしも充分でない文学や地域研究に関する図書の所蔵を可能としている。

例えば、近現代アラブ文学に着目すると、ターハー・フサイン、

ガッサーン・カナファアーニー、イブラーヒーム・クーニー、ナギーブ・マフフーズといった小説家や、アドニス、スイドキー・イスマーイルといった詩人の作品、そしてこれらの作家・作品に関する文芸評論が豊富に所蔵されている。

また、アラブ世界の歴史、政治、社会などに関する書籍については、二〇〇三年のイラク戦争、二〇〇六年のレバノン紛争、二〇〇八年末から二〇〇九年初めにかけのガザ紛争などといった政治的出来事を受けるかたちで、イラク、シリア、レバノン、パレスチナを中心に、政治指導者などの自伝、地誌、研究書などが精力的に収集されている。

さらに、学部(前期)のカリキュラムにおいて基軸をなすアラビア語教育との関連では、『大言海』(ムヒート・アルムヒート)に代表される古典的な辞書・辞典や、アラブ世界の言語学に関する図書も豊富である。

これらの図書はいずれも稀少図書に分類されるものではなく、現在もその多くが現地の書店で購入可能である。また、上記のような所蔵状況に問題点がないわけでは

なく、とりわけ蔵書冊数の少なさは、克服すべき課題として、アラビア語およびアラブ地域の研究・教育に携わるすべてのスタッフが対応に苦慮しているところである。

しかし、こうした問題点は、当該地域における言語、文化、社会、政治を動態的に把握することに重きを置く本学の研究・教育の志向や、この志向を忠実に体现する付属図書館のアラビア語図書の蔵書の価値を減じるものではない。

近年における中東・北アフリカ地域研究は、イスラーム教の教義そのものや、それが社会、政治、経済に及ぼす影響を解明することに力点を置いてきた。このことは過去数十年における日本国内での研究蓄積を見れば、一目瞭然である。だが、いわゆるイスラーム原理主義勢力の台頭や、九・一一事件の発生などを前に、こうした傾向は、本来の意思に反したかたちで理解され、中東・北アフリカ地域のあらゆる事象をイスラーム教との因果関係のなかで理解しようとする安易な思考様式を助長することもある。

周知の通り、東京外国語大学における対象地域へのアプローチ

は、欧米諸国などでの研究蓄積を踏まえたうえで、現地の言語を習得し、それをツールとして、地域の諸問題に多角的かつ包括的に触れることを本文としている。附属図書館における中東・北アフリカ関連の図書は、まさにこうしたアプローチを通じて収集されたものであり、その独自の姿勢を継続することで、日本アカデミアのなかで適切な役割を果たし得ると考える。

附属図書館の蔵書を含む東京外国語大学所蔵図書・資料は「東京外国語大学附属図書館OPAC・WEBサービス」(<http://www.tufs.ac.jp/library/index-j.html>)にて検索が可能である。

(あおやま ひろゆき／東京外国語大学総合国際学研究院准教授)